「巌頭之感」の波紋

高橋新太郎

一

第一高等学校文科第一年に学ぶ(1)藤村操が、傍らの檜の大樹に「巌頭之感」と題する百四十文字を遺し、華厳滝に身を投じたのは明治三十六年(一九〇三)五月二十二日と推定される。数えの十八歳、満十六歳十ヶ月の生涯であった。北村透谷の自殺から略十年、東京大学富井政章、戸水寛人、高橋作衛、小野塚喜平次ら七博士の対露強硬意見発表(『東京朝日新聞』)の一月前のことである。

「那珂博士の甥華厳の瀑に死す」との見出しの下に、逸早くこれを報じたのは、涙香黒岩周六の『万朝報』紙(五月二十六日)で、高等師範学校教授那珂通世が、朝報社に寄せた次の一文を掲げた。

嗚呼哀いかな、痛しいかな。余が兄の子藤村操、幼にして大志あり、哲学を講究して、宇宙の真理を発明し、衆生の迷夢を醒さんと欲し、昨年より第一高等学校に入り、哲学の予備の学を修め居たれども、学校の科目は、力を用ふるほどの事にも非ずとて、専ら哲学宗教文学美術等の書を研究して居たりしが、去る二十日の夜、二弟一妹と唱歌を謡ひ、相撲を取り、一家愉快に遊び楽み、翌廿一日の朝、学校に行くとて出でたるまゝ、廿二日になりても帰らず、母大に憂ひて、机の引出しを明けて見たるに、杉の小箱の蓋に「この蓋あけよ」と大書しあり、開いて見れば、七枚の半紙に、二弟一妹と近親五名と親友四名とに配賦すべき紀念品と学校その外友人十余名に返すべき借用書籍の名とを(本箱の番号迄も書き添へて)委しく列記せり。「こは死を決したる家出なり」とて、急に大噪ぎとなり、親戚朋友の家へ電信電話にて問合せたれども、何れも、「来らず」と云ふ。午後八時に至り、「日光町小西旅館寓」として郵書達し、「不幸の罪は、御情の涙と共に流し賜ひてよ。十八年間愛育の鴻恩は、寸時も忘れざれども、世界に益なき身の生きてかひなきを悟りたれば、華厳の瀑に投じて身を果だす」との趣意を委しく告げこせる、余これを聞き、徹夜輪行して日光に至らんと思ひ、駆け出したるが、栗橋の渡しの夜の渡さぬに心附き、残念ながら下谷より引返し、今朝(廿三日)の一番汽車にて、操の従兄弟高頭正太郎と共に日

光に至り、巡査車夫等と力を合せて、華厳の瀑の上下を隈なく探したれば、瀑の落口の上なる巨巌の上に蝙蝠傘の地に植てるあり、近寄りて見れば、大樹を削りて左の文を記せり。

巌頭の感

悠々たる哉天壌、遼々たる哉古今、五尺の小軀を以て此大をはからんとす。ホレーショの哲学竟に何等のオーソリチーを価するものぞ。万有の真相は唯一言にして悉す、曰く「不可解」。我この恨を懐いて煩悶終に死を決するに至る。既に巌頭に立つに及んで胸中何等の不安あるなし。始めて知る、大なる悲観は大なる楽観に一致するを。

樹の傍らには、傘の外に、大なる硯と墨と太き唐筆と大なるナイフとあり。此等の器具は、家を出づる時予め用意したりと見ゆ。その運筆の遒美なるを見れば、巌頭に立てる時心中の従容として安泰なることは察するに余りあり。嗚呼、余が如き楽天主義の俗人の甥にいかなればかゝる極端の厭世家を生じたるか。思へば思へば不可思議なり。巌角に攀ぢて瞰下せば、六十丈の懸泉は、巌石を砕いて雷の如くに轟き、滝壺は、暴風雨の如き飛沫に蔽はれて見えず、かくて身の丈五尺五寸余、眉目清秀にして、頬に微紅を帯び、平生孝友にして、一家の幸福の中心と思はれし未来多望の好少年は、去つて返らず、消えて痕なし。嗚呼哀いかな。

明治卅六年五月廿三日の夜
中禅寺湖畔の旅館蔦屋にて
叔父那珂通世哭して記す

翌二十七日の『万朝報』は、那珂の痛哭の文章に次いで、「天人論の著者」なる署名の「少年哲学者を弔す」と題する一文を掲げ、「我国に哲学者無し、此の少年に於て初めて哲学者を見る、否、哲学者無きに非ず、哲学の為に抵死する者無きなり。独のショッペンハウエル悲観の極に楽観ありと為す、而も自死するに至らず。然らば哲学の極致は自死するに在るか、曰く何ぞ然らん、唯だ信仰の伴はざる哲学は、茲に窮極するなり。」「然れども哲学の多くは信仰を有せず。全く暗室に、無き黒き帽を探るなり、ただ心的一元論に至りて初めて信仰あり」「余、天人論を著す、人をして明白々の室に黒帽を看認めしめんとの微意なり、恨むらくは巌頭に感を書して六十丈の懸泉に投じたる此の少年哲学者に一冊を寄献するを得ざりしことを。『不可解』の一言を以て宇宙の秘を悉すの時は過ぎたり、少年哲学者は悲観と楽観と合する所にホレーショ以外の光明に接したるか、大谷川の水、長へに碧にして、問へども答へず、余は那珂博士と同じく痛哭」の文を綴った。『天人論』とは、藤村操投瀑の一週日前に、〈宇宙倫理観〉と副題されて朝報社より刊行された黒岩周六の新著であった。その「第一章物質」の「第一節総説＝根本の疑問」の第一項「天と人」に「人は疑問の中に生れ疑問の中に死す何故に生れたるやが一の疑問なり、生存中に何を為す可きやが二の疑問なり、死すれば何の境に入るやが三の疑問なり、此疑問を解釈するを人生観と云ふ、人は自ら知らずして生まる、即ち天然に生れたるなり、然れども其の天然の『天』と云ふ者は何ぞや、是れ人生観の奥底に横はれる大問題なり、之を解釈するを宇宙観と云ふ、宇宙観と人生観とを合せて余は天人論と名く」と記してある。この著は、藤村操の「巌頭之感」とともに喧伝されて、一箇月の中に五版を重ねた。新聞各紙は、競って藤村の自殺に至る動静を探り、操

が自殺の前夜、同級の藤原正に宛てて書いた「宇宙の原本義、人生の第一義、不肖僕には到底解きえぬ事と断念め候程に敗軍の戦士本陣に退かんずるにて候」なる書状も紹介された。以降、新聞・雑誌には、藤村操の死を論ずる知名の士の所見が吐露され、無名の士の投稿も相次いだ。六月一日の『大阪朝日新聞』は、角田浩々歌客、踏東海人、木村寸木を動員して「哲学と人生」(一青年の死と世論)と題する社説を掲げた。浩々歌客はそこで、藤村操の死が、何故にかくも世人の注意を喚起するに至ったかを整理して、第一に「借金に苦み或は恋愛に覇され或は現世志望の遂げざるに依れるなど、自己若しくは社会との葛藤の結果に身を殺したるとは異に、宇宙といひ万有といひ人生といふ」ように「事の関係学問に在り、自己の思想と自己存在との葛藤衝突にして、少くとも其死が悲壮の意義を含む故」だとし、第二には、その死処が、御茶の水や吾妻橋といった、人の往き交う平凡な場所でなく「風趣直ちに人をして深邃の意義をしのばしむる日光山華厳の瀑」なること、第三は「失恋の惨蹟を留めし益田氏の子が投身したる前例」あること、第四は「其人の青年なること」、第五に、その死を報じた人が「死者の叔父にして名誉ある文学博士なること」を挙げ、「なほ、巌頭の樹を白らげ、遺書を留めたるの行為は博士の報にある通り従容死途に就きたりと見ると共に極めて小説的なることは、殊に世人を注目させしものなるべし」と付した。そして『万朝報』の前掲涙香文や、『国民新聞』の「其解決すべからざるの解決を尋ねんと欲す、是れ実に忍ぶべからざるの痛恨の事なり……凡そ人たるもの、人事を尽して天命を待つの外、豈に他の道あらんや」とする徳富蘇峰や、『報知新聞』の「経世経国の眼を以て之を見る、此現象は極めて不健全なる思想の発動ならずんばあらず……願くは人は人たれよ、人以上とならんことを求むる勿れ」とする石川半山、『東京日日新聞』の「蓋し一種虚栄心的狂作乎……解すべからずば解するまで力めよ、厭世より楽天たるべき道理」という「近事片々」子の論を紹介した上、

……死者の死をして其意義を空しうせしめざらんは、実に生者の責任にして即ち「不可解」を解説すべき一の職分なり。況んや解決に必要なりとせらるゝ学術に対し失望せる青年の死の如きをや。吾人は吵乎たる青年の死をして、死といふことが彼自身一刹那の安立を得せしめたるを彼の為に満足すると同時に、一個青年の自亡がよく現代存続の青年に多少人生の意義を合点せしむべく、世人の之を解道せんことを望む。生者は須く生者一切の為に一切此生より去る死者の死をして悉く善死たらしむべきなり。……

と弁じた。亀谷天尊は六月五日の『朝日新聞』に寄稿した「懐疑と信仰(弔少年哲学者)」で、藤村操の投身を「ロイカジアの岩頭より海中に投じたる天女サツフオの往事」に擬し、巌頭の感を「文簡潔にして旨高妙、蓋し古の聖者霊均氏の離騒経に勝る万々」と賞揚し、「古来哲学考究の為に遂に悶絶して死を敢てしたる者は唯可憐の少年藤村操氏あるのみ。沈思冥想、仔細に氏の心裏を推究し来れば、実に死以上に属する、一種絶大の理想の存するありしを認むべしと雖も、かくも悲惨の死を敢てしたるの原因は、畢竟懐疑哲学の罪なり。」として、藤村が華厳経大乗の教理に学ばなかったことを惜しんだ。

藤村操の自死を、自らに身を寄せて論じ、文学史的脈絡においてもっともよく、これをとらえたのは『読売新聞』(六月七日・十四日)

「癸卯文学」欄で「我れ何者ぞ」「センチメンタリズム」の題下に、煩悶、感傷の免かるべからざることを説く中島孤島で、「……あゝ我れ何者ぞや。人生幾多の憂愁あり、人誰か煩ひなからん。吾等はたゞこれを忘るゝのみ。事業に忘れ、生活に忘れ、国に忘れ、家に忘れ、学に忘れ、藝に忘れ、酒に忘れ、情に忘れ、快楽に忘れ、宗教に忘る。たゞ忘るゝなり、然りたゞ紛るゝなり。是れを以て静夜思ひを衷に潜めて、一念我が生の秘密に到ることあらば、誰れかまた其の心の痛みを感ぜざるものぞ。然かも人は遂に此くの如く忘れ、此くの如く紛れて、永へに此の疑問の閃きに背かざるべからざるか」と問い、さらに理想と現実の矛盾、当代の病患を剔抉して、

嗚呼我れは如何にかすべき。既に識らず、時代の病患に触れて煩悶し、苦悩す。挙世皆な非にして我れも亦非なり。如何にすべき。或ものは世を厭ひ、生を咀ひぬ。或ものは泣き、或ものは怒り、或ものは叫びぬ、嗚呼我れ何者ぞやと。以為へらく、我れを知るは凡てを知るなり、我が脚下を掘りて、湧き出づる泉に汲まずや、人何すれぞ近く其の心に求めざると。事狂暴に似たりと雖も、遂に声を放つて一世の眠りを喚び覚さずんば已まざるなり。人は以て時代の痼疾といふ。然かも不健全なる社会が久しきに堪ゆべからざるを知らば、老衰せる社会に対して、復活の使命を伝ふるものは寧ろ此の痼疾にあらずや。……かくの如き不満の感情は常に青年の胸中に潜みて、時に鬱然として一世を圧倒す。其の現はるゝや、一切の外被を剝ぎて、直ちに赤裸々の我れを示さんとす。其の力茲に存し、其の弊も亦茲に存す。此くの如くにして幾多のウエルテルは生じ、幾多のマンフレツドは出づ、……

と強調し、かかる明治のセンチメンタリストの代表として北村透谷と高山樗牛の名を挙げ、「若し夫れ近時藤村某の如きに至つては、また等しく、此思潮に漂へるもの、世は返す〳〵もかの痼疾の恐るべきを唱ふと雖も、我れは寧ろ茲に潜める生命の閃きを認めんと欲す。悩あるものは幸なる哉、世は悩ある者によつて生きん」と高唱した。六月十三日夜、数寄屋橋会堂で朝報社有志講演会が開かれたが、涙香黒岩周六は、「藤村操の死に就いて」講演し、前出の「近事片々」の論説に代表されるような、世論一般の批判に答えるかたちで、操の死が「心界の暗に対する暁鐘」であり、「世人若し之れ（シーリアス）に依りて人間に快楽以上、肉慾以上、算盤、物質以上に大に真面目なる問題のあることを想起せば彼の死は空からずと云ふ可し」と、その自死の意義について弁じ、「時代に殉じた」警世者たることを強調した。

二

「此の如き意気地なき青年が現代の国民たるかと思へば、憂慮せざるを得ず」（『時事新報』六月十五日）「其挙や殆んど無意義（ナンセンス）なり」（『東京朝日新聞』六月二十四日）とする世論の大勢とは別に、藤村操の華厳自死は、同世代の知的青年たちに強い衝撃を与えるとともに、後継投身者が相次ぎ、社会問題化した。

向陵同窓の若者達への衝撃はより一層深かった。一高で一級上だった阿部次郎は、明治三十六年一月二十四日、同窓の岩波茂雄らと神田青年会館で行われた故高山林次郎の追悼式に臨み、一月前に病死した樗牛を追懐して日記に「常に煩悶苦闘して向上の道に進まんとせし其の精神今や肉体を離れて無方に遊び、其最愛の妻最愛の子

を残して唯面影を一葉の写真に止む」と記したが、藤村の華厳投瀑の死の委細を寮生藤原正から知らされた五月二十六日の日記の一節に「万事皆夢の如く、此三四日は唯悲哀と追懐との中に暮す。如何に其死に様の美はしくして欠点なきよ。如何に其死因の瞑想的にして汚れなきよ」と記した。同じ寮生岩波は、後年の回想で「厳頭の感」を「不朽の詩」、当年の煩悶時代を代表する「記念碑」とし、「私達もこの詩を読んで幾度泣かされたか知れない。今日に至るまで一字一句も忘れない。」と記している。

当時は、天下国家を以て自ら任じ「乃公出でずんば蒼生をいかん」と云つたやうな学生が社会的に多大の関心をもつた前時代の後を受けて自己を内観する煩悶時代とも云ふべき時代であつた。悠久なる天地にこの生を托する意義を求めて苦しむ時代であつた。伊藤左千夫のうたへる「寂しさの極に堪へて天地に寄する命をつく〳〵と思ふ」といふやうな気持を誰も彼も持つてゐたのである。藤村君はその勇敢なる先駆者であり、真面目なる犠牲者であつた。その頃同君のやうに自殺した人も少くなかつたし、苦しんだ人も多かつた。

一高の『懺欅樹』（昭和十年二月）に寄せた右の一文は、藤村操をとりまく、時代の空気と、知的煩悶の青年達の心緒を伝えている。岩波は、三十六年の秋に藤村操のあとをしのび、華厳滝の壮厳美にうたれて「生死を超越した如き陶酔の心境」を味わってもいる。岩波自身、「自殺組」と言われ、人からあぶながられてもいたのである。藤村と同級であった安倍能成の『明治思想界の潮流——文芸評論を中心として』（岩波講座日本文学、昭和七年十月）での概括を、右の岩波の回想に重ね合わせれば、より一層、時代の様相は明らかであろう。

日本主義の首唱者たりし高山樗牛が三十三四年頃、その国家主義から明瞭なる個人主義に転向するに及んで、天下の青年（といつても文学的思想的傾向を有するものに限られたかも知れない）も亦靡然として個人主義的傾向に赴くに至つた。筆者の如きも彼の日本主義に動かされるよりは遥に多く彼の個人主義に動かされた。日清戦役の前に北村透谷を襲つた様な悩みが、日露戦役前の青年の中にも来た。……

樗牛の影響も手伝つて、三十四五年頃から日露戦役の頃までの間は、人生問題が青年の関心事になり、所謂青年の煩悶と青年の自殺との問題が頻に教育者の頭を悩ますに至つた。その内生活に於て国家的公共的生活と離れんとし、その潔癖と感情とによつて世俗的事功と好尚とを卑まんとした彼等青年にとつての人生問題は、結局自己の問題に帰した。自己の真に求める所、自己の血と涙とによつて得た所のものの外に、人生の価値はない。かくの如き主観的にして絶対的なる要求は、ハムレツトの所謂「生きるか死ぬるか」を問題にせざるを得なかつた。かくして人生問題に関する著述が多く出で、その最世に行はれたものの中に唯心的一元論を標榜する黒岩涙香の『天人論』があつた。さうして樗牛の個人主義に満足し得ない精神的なる青年の関心は、更に進んで宗教に向つた。

同じような感慨は、『明治浪曼文学史』（昭和二十六年八月、中央公論社）の著者で藤村の後輩として京北中学に学んだ日夏耿之介の洩らすところでもあった。

海老名弾正主筆の『新人』明治三十六年七月号に「藤村操君の死

を悼みて」を寄せて、「悲泣三日、羨望七日」の心懐を記した魚住影雄は、藤村投瀑四ヶ月後に一高同窓となるが、姫路中学を退学、三十四年四月に京北中学第五年級に編入した際の操の同級生でもあった。日露開戦三ヶ月後の明治三十七年五月、一高の『校友会雑誌』百三十七号に「亡友藤村操君の一週年」に当って長文激烈の「自殺論」を掲げたが、篇中、左の二ヶ所が、内容に問題ありとして学校当局により墨で抹消の上、生徒に配付された。

……其前に君国何かあらん、親と兄弟と朋友と何かあらん、我れ豈父母に乞ひて生れ来らんや、君国に誓ひて生れ来らんや。君国の恩は我等が無垢の児心に小学校教員が刻み込みたる迷信に非ずや、此迷信を脱却して自家本然の純なる中心の声を聞かんがために要せし苦心はそも幾何なりけん。人道の盛大と人物の尊貴とは乞ふ我れの此天地の意義あるを認めたる後に聞かん。

……つら〳〵観ずるに我や母胎を出づるに先だちて道徳の実行約したることあるを記憶せざる也。豈加之ならんや、よし一億年の昔に溯るとも我や生れんことをすら希ひたることあらざる也。誰か猶君父の空名を傭ひ来つて死の一念を飜さしめんとするや。

明治四十一年九月に自己の思想史を叙した「自伝――友人諸君へ」(『折蘆書簡集』所収)で「藤村君とは殆んど此三四の外に深い交りの歴史はない。然しあの『巌頭の感』はいかばかり僕の心を拘つたであらう。僕の曩日の苦痛は藤村君の外に知りうるものなく、藤村君の死んだ心は僕の外に察しうるものはないといふ様な感がした。」と述懐している。折蘆の「藤村君は至誠真摯であつたから死に、僕は真面目が足りなかつたから自殺し得なんだ」との思いは、一高同窓の若者達ばかりでなく、多くの煩悶青年達にも共通する思いであった。藤村自死は同級生達に深刻な動揺を与え、学校などはどうでもよい、自分の要求する所に従うべきとして学科をよそにした図書館籠りや放恣な自己拡充に身を委ねて、三十七年七月の学年末に安倍のクラスは能成を含めて十七名が落第し、落第を免れた野上豊一郎は「けれども、また憂鬱の日がつづいた。それから大学を出る頃まで、われわれのクラスは自殺者を三人出した。」と回想している。

藤村の華厳投瀑後、同処で投身する者が相次ぎ、同年だけで十一名を数えた。日露戦後の明治三十九年に、岡山の女学生松岡千代が、哲学書に傾倒しての自殺と報ぜられ、「女藤村」と称されもした。明治四十一年生まれの亀井勝一郎が十五、六歳の頃、哲学志望の意を両親に伝えたところ「藤村操のように自殺するからいかん」といってはねつけられたというエピソードは、藤村操事件が、地方の庶民の間にまで及ぼした波紋の一端を窺わせる。「煩悶宗」「華厳宗」などと呼びなされるような、一般の冷嘲をよそに、藤村操の華厳自死の意義を、もっとも純粋に美化し象徴化して、一種の〈神話作用〉を推進したのは、これら一高を中心とした、いわゆる「大正教養派」と目され、これを支えた人達であった。内観の時代の「勇敢なる先駆者」「真面目なる犠牲者」として藤村の華厳投瀑を詩化し酔化し、自らのあるべき姿をそこに重ね合わせようとする心情が、当時の知的青年たちに強くはたらいていたのである。先の「虚栄心的狂作乎」の語もあったような、大樹に「巌頭之感」を墨書しての投瀑に衒気と客気をよみ取ろうとする俗説を斥け、世界苦的厭世観による

哲学死として象徴化され、新時代の到来を告げる暁鐘とされた。今日、独逸観念論に親炙する大正教養主義の原点に藤村操の自死を定位しようとする論者も少なくない。

特異なプラグマチストとして知られる丘浅治郎は、ものごとを絶対化する態度を斥けてその生涯を貫いたが、その著『進化と人生』(明治三十九年六月、東京開成館)の中で、「宇宙に於ける人類の価値を忘れて、実際あるよりは遥に高尚な、有力な、神聖なものである如くに思ひ込むことは、総て誇大狂の範囲に属するものと見做すべきであらう」として、「先年或る少年が宇宙の解すべからざることを苦に病んで華厳の滝へ飛び込んだとて、世間大評判であつたが、此等は其極端に達したものであらう」と、藤村の華厳自死にも言及している。丘の主張は同じ著の「芸術としての哲学」なる称呼にもうかがえよう。「今日世の中で浅薄な哲学的書類が青年輩を誤らせるのは、全く世間一般の人々が哲学の真価値を誤解し、芸術なるべきものを学問の如くに見做し、之に依れば宇宙の真理まで達することが出来るものの如くに思ひ誤つて居るのに基くのであらう」として、絵画・音楽・芝居・浄瑠璃等と同様に、「娯楽を得るための方便」として、よろしく哲学を味ふべしと説く。

ミル、スペンサー等の、経験論・実証主義・進化論によってその世界観的人生観の開眼を果した長谷川如是閑は、独逸観念論を嫌悪して生涯変ることはなかったが、晩年の『ある心の自叙伝』(昭和二十五年六月、朝日新聞社)の中で、明治三十年代の知識青年の型を、封建制を清算した民主的国家主義の典型に属する一群と、既に世界的に進行していた資本主義末期の「社会的解放」の要求に燃えている国際的の典型に属する一群と、国家的・社会的に何らの積極性も行動性も示さず、ただ個性の「無力の叛逆を煽」りつつ、「茫漠たる懐疑性」に包まれて低迷する一群、の三つに腑分けし、その第三のカテゴリーに属する「煩悶青年」達を簡単に「読書中毒」として片づけてしまい、「同情するよりはむしろ軽蔑」し、「その憂鬱なグループ」は、「明治の歴史が真昼の太陽のように輝いていた、日露戦役前後が、量的にも質的にも、絶頂だったが、そこに深い意味のあることなどは、第一のカテゴリーに属していた私には見てとれなかったのだった」と反省し、この最後の群れは、「あれども無きが如き、陰性的存在」で、「時代の歴史に躍らされるにはあまりに個人的であり、内面的」であったが、その「潜勢力」に於ては、その後の「日本人の知性と感性の歴史に決定力を持つほどの優性分子を含んでいた」のであり、明治末から大正にわたる「日本のインテリ層の近代的性格の長所も短所も、強味も弱味も、この〈煩悶期〉を潜って来た若い世代の人たちの責任だった」と結論づけた。

三

藤村操が投瀑したと推定される五月二十二日から、四十二日後の七月三日に至るまでなぜか遺体が発見されなかったということもあって、当初より藤村操生存説が取沙汰され、以後さまざまなる〈生ける藤村操〉が創り出されて行く。

『東京朝日新聞』は、明治四十年三月二十五日から四月二十五日にかけて「操の書簡」を掲げた。平木白星によれば、「客年十月の頃、藤村操なる氏名を以て、我に宛たる書簡を致し来るものありき、最初には何人かの好事なるべしとて、……一読過の後何処へか投棄して顧みざりしなり、……其後第三信を手にするに及び、稍や思ひ惑

ふ所あり、続て、第四信第五信の到着するに遇ひて、一種の興味と了解とを生じ爾来一々これを保存して、今や第八信を得るに至りぬ。……不思議は不思議とし、左に右『藤村操』なる仮名を有する人よりの書信として、少しくこれに筆を加へ」公表することにしたもので、書信の封筒に付された郵便局の消印は、常に「下野足尾」とあったという。第四信には、次のごとくある。

……

死したる余に何の祖先か候べき、何の情交か候べき、恩恵が何ぞや、義務が何ぞや、何の法律か道徳かある、何の毀誉褒貶かある、王者の権、文明の盛、我に於て何かある、挺天凌穹をも望みて得べき自由とは、死したる我の上にこそあれ、死したる我にこの自由を検束すべき何の神仏王権か候べき。死を怖るるは自家意識の尽滅を恐るゝにあるか、自家意識の有無、何ぞ永劫的意義の有無と関せんや。真理と神と共に永遠にて候。……

……

「操の書簡」は、第七信の登載で中絶する。

明治四十年六月一日発行の「藤村操著」をうたった『煩悶記』(2)(也奈義書房刊)は、編纂者の岩本無縫の「本原稿の由来」によると、藤村操が談じた所見を親しい知己がノートに書き止め、それに操自身が加筆した草稿の写しといった手の込んだもので、「柚木唯在」なる青年が借金の形に置いていったものという。

幾度か自殺を試みたものの、遂に果せず、北海道に向かい、海賊船に拾われて北欧に到り着いた藤村操が、「自己の達した思想心懐の経緯」を故国の知己に托して公開したものである。「操」は次のような「盗賊哲学」を吐露する。

……官吏は社会制裁の名によりて、罪人と仮称せらるゝ人類を斬る、軍人は国家てふ名によりて、別地の人間を斬る、強盗は邪魔者の名によりて、物貨の所有者を斬る、甲地人は乙地人を軍事探偵の名によりて斬る、本夫は姦婦姦夫の名によりて、情的合意せる二つの人間を斬る、仏蘭西国民は人民の名によりて、天皇と名付けられたるルイ十四世てふ人間を斬りたるは何ぞ。

見ずや、何人によりて如何に命名せらるゝと雖も、殺人は依然として殺人なり、若し殺人てふ事にして断じて悪なりとせば、其の行為は悉くこれ悪なり、然るに社会の一時代はそを率強付会して之れを正邪に両別す、

借問す、誰れか烏の雌雄を知る者ぞ　(五十一)

社会に私有制度あり、其の保護法も亦是れあり、之れ恰も水の停滞に異ならず、見よ其の私有は新陳代謝せざる水にして、保護法は則ち流通を壟断する堤防にあらずや、若し水を停滞せしめて子子湧く勿れと言ふものあらば、誰れかよく笑はざらんや、若し私有制度を存して盗む勿れと謂ふ者あらば、誰か亦笑はざるを得んや、

夫れ私有あるが故に盗賊生ず、盗賊あるが故に私有生じ保護法生ぜしにあらず、されば盗賊を憎悪し、絶滅せしめんとせば、宜しく先づ囹圄を作り赭衣を縫ふに前ちて、私有制度を廃し、一切機関を公有にし、共同社会を現出するに勉めよ、然らば盗賊は自然に消滅せん　(五十三)

大正二年七月刊の巌頭の人著『華厳の嵐操の告白』(岡村書店)は、山路赤春の家庭小説仕立ての作品で、平塚文学博士の書生となって第一

高等学校に籍を置く清原操に、博士の娘君子と山川代議士の令嬢房子の恋をからませ、華厳巌頭から身を投げた操が断崖の藤蔓に支えられて生き延び、名を変えて鉱夫に身を隠し、鉱山暴動に参画することなどをおりこみ、今は、高尾山麓の荒寺の住職となって瞑想の生活を送っているといった筋立てで、房子の父は、横暴な桂内閣を瓦解に追い込み、憲政の神として名声を博する代議士との設定である。

大正五年七月刊の匿名子著『生存せる藤村操』(天洋社)は、「僕」が「先生」の仲介によって、今は「立ん坊」を業として生きている藤村操に会い、彼の女性観、労働観、人生観等を訊き出すといった趣向で、投身自殺に失敗した操が世間に顔が出せずに流浪の身となり、足尾銅山の坑夫となったりしたが「明治天皇陛下」の「御大葬が拝したいばかりに」東京に出て来て、車の後押しをする「立ん坊」として自由な境界を楽しむ感懐がのべられている。

今日の学校教育では、決して車挽きや車力になれとは教へて居ない。かゝる教育を受けた人間から見れば、立ん坊の如きは卑賤な無意義な人間であり、生活であるに相違はない。然し乍ら、自分からこれを見ると、今の自分の此の商売は実に己れを知つて、己れの能力に従ひ自ら突進して得た職業である。……軍艦を食つたり、袂の下に手をやつたり、一万円とかをどうかしたりしてまで、金の奴となり、人から笑はれ裁判所の厄介になるやうな、大臣華族貴人富豪などより、遥かに誇るべき楽しき意義ある生活である。況んや、人生なるものを感得し、世を超脱し悠々天下の推移に処するが如きは、実に味ふべき生活ではないか。こゝに就職の意義がある。こゝに活動の意義がある。

生ける「操」に仮託して、ある者は、個の自由を謳い、ある者は、立身出世主義を斥け、また、ある者は社会・国家への批判の矢をそこに託した。「仏蘭西国民は人民の名によりて、天皇と名付けられたるルイ十四世てふ人間を斬りたるは何ぞ」「私有制度を廃し、一切機関を公有にし、共同社会を現出するに勉めよ」と謳った『煩悶記』は、「安寧秩序紊乱」の廉で発禁処分を受けた如く、〈生ける操〉は時代を映しつつ、危険を胎む存在ともなって行った。

(1)　この年(明治36)一月の第二学期より漱石夏目金之助は、第一高等学校教授・東大講師として赴任、藤村操、安倍能成等々は、英語の最初の教え子。

(2)　谷沢永一氏蔵。松本克平氏からコピーの借覧を得た。コピーの因縁については、松本克平著『私の古本大学』(昭和56・2青英舎)付録「青英舎通信1」の谷沢永一・松本克平対談「読書人の饗宴」に詳しい。『浪速書林古書目録』第十号(昭和55・12)特輯〈近代日本における発禁本とその周辺探索〉の記載のごとく、明治四十年五月二十四日「安寧禁止」。

(たかはし　しんたろう・学習院女子短期大学教授)

*